

『水鏡』の歴史叙述の特徴

— その歴史観と世界意識について —

李 莘 梓

一、はじめに

『水鏡』は四鏡では三番目に成立した作品だが、内容としては、四鏡の中でも最古となる神武天皇から仁明天皇までの事項を編年体で記載している。喜田貞吉氏は「水鏡と扶桑略記、水鏡の価値を論ず」¹⁾において、「此の一部の書、之を無遠慮に評すれば、極めて暗き史眼を以て扶桑略記を抄録し、之を多少敷衍して仮名文に翻訳し、之に極めて取るに足らぬ俗説を附け加へ、而して一編の趣向を大鏡にならへるものなり」と評価した。その後、平田俊春氏がはじめて『水鏡』と『扶桑略記』との比較研究を行った。平田氏は「水鏡の成立と扶桑略記」²⁾において、「水鏡は全く扶桑略記の抄訳にほかならないことが明かとなった。換言すれば、水鏡は扶桑略記以外の材料を用いていないのである」という判断を下した。それ以後の両書の比較研究は、ほぼ氏の意見を認めるものである。即ち、『水鏡』は『扶

桑略記』の抄出物とされ、一文学作品としての評価は低いと見なされたのである。

近年の研究では、加納重文氏が『水鏡』記事の独自性―『扶桑略記』との史料比較から―³⁾において、『水鏡』と『扶桑略記』をはじめとする史料を比較し、平田氏の「水鏡において略記に追加する記事はない」という検討結果を認めながらも、

略記記事の取用にあたって、完全に無思慮というわけではなく、書き加えられた記述のなかに、『水鏡』と独自のな思考を伺えるものもあった。それが、

1. 仏教の方面への格別な関心
 2. 撰関としての藤原氏の立場を擁護する意識
 3. 孝養仁義といった倫理感
 4. 古今の歴史を比較観照から現在のみを混迷と捉えない意識
- といったものであったが、略記記事を取捨選択する態度からは、

5. 逸話・挿話への関心

6. 奇妙な性的好奇心

なども、追加して感じられるものであった。

と『水鏡』の独自性をまとめた。

加納氏をはじめ、近年の研究は『水鏡』の独自性を論ずるものの、あくまでも各話に対する考察にすぎず、総合的な「水鏡論」は出ていない。本稿では、先行研究を踏まえた上で、鏡物というジャンルに目を向け、『水鏡』の歴史語りと語り手について検討し、『水鏡』が語ったコスモロジー、著者の歴史叙述の意図を考察する。

二、『水鏡』の歴史語り

『水鏡』以前の鏡物『大鏡』・『今鏡』は、紀伝体の形で歴史を叙述したものである。

『大鏡』巻一は仁明から後一条までの各天皇の伝記で、この部分
が紀伝体史書の帝王本紀に当たる。巻二く巻五は冬嗣から道長までの各代藤原家権力者の伝記で、この部分が紀伝体史書の列伝に当たる。巻五最後の藤原氏の物語に、鎌足から道長までの摂関家の略記が記載されている。巻六は藤原家と関わりの薄い昔話が綴られている。総じて言えば、『大鏡』は紀伝体の形で物語が記述されている。

『今鏡』巻一く巻三は後一条から高倉までの天皇家の伝記で、この部分が紀伝体史書の帝王本紀に当たる。巻四く巻六は藤原家の人

間や藤原家出自の後の子孫の伝記で、巻七は源氏の人々の伝記で、巻八は親王たちの伝記である。この五巻は紀伝体史書の列伝に当たる。巻九は人物伝記と関わりの薄い昔話、巻十は『古今集』や『源氏物語』の著者紫式部をめぐる問答が記載されている。総じて言えば、『今鏡』も紀伝体の形で物語が記述されている。

『水鏡』は先行の『大鏡』・『今鏡』とは違い、編年体で物語を構成することで、歴史に影響を及ぼす重要な人物より歴史の流れそのものを重視した。

中国唐代の劉知幾は『史通』において、編年体を次のように評価した。

夫春秋者、繫日月而爲次、列時歲以相續、中國外夷、同年共世、莫不備載其事、形於目前。理盡一言、語無重出。此其所以爲長也。至於賢士貞女、高才備德、事當衝要者、必盱衡而備言、迹在沈冥者、不枉道而詳說。如絳縣之老、杞梁之妻、或以酬答卿而獲記、或以對齊君而見錄。其有賢如柳惠、仁若顔回、終不得彰其名氏、顯其言行。故論其細也、則纖芥無遺、語其粗也、則丘山是棄。此其所以爲短也。

劉知幾は『春秋』を編年体歴史書の代表とする。編年体歴史書は時間順で古今東西の歴史を重複するところなく細かく記述し、物の道理を明らかにする。才能ある人の国を治める記事もきちんと記録する。しかし、柳下惠や顔回のような賢人の記事は記録されてい

ない。なぜなら、彼らの事蹟は政治との関連性が希薄だからである。つまり、編年体歴史書は政治にかかわるものはどんな些細なことでも記録するが、政治とかわりがない場合、たとえ歴史上の重要な人物であっても記録は一切残らない。

劉の評論を踏まえ、『大鏡』・『今鏡』と比較しつつ、『水鏡』を分析すると、『水鏡』の特徴が浮かび上がる。それは、

1. 『水鏡』著者の独自の歴史観
2. 歴史叙述のタイムスパン
3. 『水鏡』の対象世界
4. 語りの構造

である。ここで、特徴1、2、3を簡単に紹介し、特徴4は本稿の中心として第三節で詳しく分析していきたい。

1. 『水鏡』著者の独自の歴史観

著者は『水鏡』の序文において、葛城の翁の口を借りて、

本文引用（1）

おほかたはいまのよをはかなくみうとみ給て、いにしへはかくしもあらざりけんとあさくおほすまじ。すべて三界はいとふべき事也とぞおぼすべき。この目のまへのよのありさまは、おりにしたがひて、ともかくもなりまかるなり。いにしへをほめいまをそしるべきにあらず。⁵⁾

と自身の歴史観を表している。つまり、世間の事は時代に従って悪

くなったり良くなったりするものである。今の世を批判し、昔の世に憧れるのは不適切で、この世間のすべてを厭うべきであるという道理を説いたのである。

2. 歴史叙述のタイムスパン

『水鏡』は『大鏡』・『今鏡』と比べると、叙述される歴史のタイムスパンが長い。

作品	成立年代	タイムスパン
『大鏡』	1120年前後	嘉祥三年～万寿二年 176年間
『今鏡』	1170年	万寿二年～嘉応二年 146年間
『水鏡』	12世紀末	神武天皇～仁明天皇 約1522年間

『大鏡』・『今鏡』はあくまでも一時期の歴史を中心として記述を行っている。しかし、『水鏡』の場合、神武天皇から仁明天皇までの約一五二二年間の長い歴史が記されており、長い歴史を総括的に把握する著者の歴史観が窺える。

3. 『水鏡』の対象世界

『水鏡』では、日本だけでなく、インド・中国・新羅の事情も述べられている。多くの記事は仏教関係の記事であり、

- ① 仏教が日本に伝来するルート
- ② 伝来した後の仏像、香具などの輸入事情
- ③ 有名な僧侶の話

などが記載されている。その他、

①孔子の話

②神功皇后の新羅討伐の話

③新羅から来た、天皇の病を治療する医師の話

④新羅からの貢物

などがある

このように、日本の事情を中心としつつも、『水鏡』の著者は当時にとっての「全世界」を視野に入れているのである。これは院政・鎌倉期における日中・日韓の間の緊密な交流とかわりがあると考えられる。『水鏡』の著者には、「世界」に目を向け、世界においての日本、日本の外側からみる日本の立場に立ち、日本の歴史を再検討しようとする姿勢が見て取れるのである。

三、語りへの構造

『大鏡』・『今鏡』の展開の仕方に倣い、『水鏡』も物語の場を寺院に設定し、そこで語り手が経験した「歴史」を聞き手に教える。『大鏡』・『今鏡』の場合、語り手は直接聞き手に自分の体験を語るが、『水鏡』の場合は、図1に示すように、語り手①から聞き手①に伝えられた後、聞き手①が語り手に変わり、聞き手②に伝えていく。つまり、『水鏡』は二重の語りで構成されている。第一の語りにおいて、葛城で翁が経験した王朝史を修行者に語り、第二の語りにおいて、長谷寺

で修行者が以前見聞したものをさらに老尼に語った。つまり、物語の真の語り手は葛城の翁である。以上のことから、本節では葛城の翁に纏わる第一の語りへの構造を分析する。

葛城（一昨年の秋）

長谷寺（今年二月）

今

翁（語り手①）↓修行者（聞き手①）↓老尼（聞き手②）↓『水鏡』

（経験）

口伝

（見聞）

口伝

（見聞）

記録

図 1

一昨年の秋に、修行者は葛城で翁と出会い、翁が実体験した歴史を聞いた。語り手の翁の身分がはっきり記述されていないのに対して、先行の鏡物では、歴史語りに信憑性を与えるため、語り手は歴史上の实在人物と親密な関係を持つ人物として設定されていた。

『大鏡』において、語り手の世継は宇多天皇の母である班子女王の召使であり、もう一人の語り手である夏山重木は藤原忠平が蔵人の少将であったころの小舎人童の犬丸であった。このように皇族や藤原家に仕える身であるからこそ、宮廷や藤原家の内情に詳しく、語った皇族や藤原家の話には信憑性がある。『今鏡』において、語り手の老婦は自分が『大鏡』を語った大宅世継の孫娘のあやめだと名乗り、昔藤原彰子の母である倫子に仕えたことがあると述べた。紫式部との関係も序文で窺える。その上、老婦の養女も宮仕えの身

であり、この養女からも宮廷の出来事を聞いたと語る。このように、宮廷に仕える身分を明かすことで、物語に信憑性を与えようとしている。

それとは対照的に、『水鏡』の語り手の翁の身の上は謎めいたものである。

高橋貢氏は「『水鏡』の序文をめぐって」⁽⁶⁾において、『水鏡』の語り手の葛城の仙人のイメージは、一言主神と役行者を重ね合わせて造形したのではないかという。仙人が「藤の皮の衣を着る」ことは『日本書紀』などの描いた役行者の造形と重ね合わせることができ、その衣装の類似性と仏道に関心があることは、仙人が造形された時に、役行者のイメージを参考にした証拠であると指摘した。また、仙人が「神代より、この葛城、吉野山などを住処として」いることは、一言主神を参考にしたゆえの設定であると解釈している。河北騰氏も「水鏡」をどう評価するか⁽⁷⁾において、高橋氏の意見に同意している。

しかし、両氏の論では語り手である翁の一部の性質のみを重点的に検討しており、他の要素の検討は不十分であるといえる。そこで、翁の身の上の解明に関わる『水鏡』のすべての記述をめぐり、考察を行いたい。

まず、翁が登場する場面において、修行者は次のように語った。

本文引用 (2)

としごろはべちにさる事もなかりしに、をと、しのあきかづらきにてこそ、あさましきことにあひ侍たりしか。つねよりも心すみてあはれにおぼえて、経を誦したてまつりしに、谷のかたより、人のけしきのしてまうでこしかば、いとものおそろしくおぼえながら、経を誦したてまつりしに、九月かみの十日ころの事にて、月のいりがたになり侍し程に、ほのかにそのかたちをみれば、おきなのがたしたる物のあさましげにやせ神さびたるが、ふぢのかはをあみて衣とし、竹のつゑをつきたるがきたれるなりけり。やう／＼かたはらへきよりていふやう、「御経のいとたうとくきこえ侍つれば、まうできたる」といふ。ものおそろしくおぼえ侍しかども、鬼魅などのすがたにもあらざりしかば、仙人といふものにやと思て、かく申ほどに、八の巻のすゑつかたなりしかば、又一部を誦してきかせ侍しかば、(後略)

修行者の話によると、翁の姿は次の通りである。

a. 法華経を聴聞してから現れた。

b. 瘦せ細っており、藤の皮で編んだ衣を着、杖を突いているが、妖怪変化などの姿ではなく、仙人のように見えた。

続いて、翁は自分の経歴を述べる。

本文引用 (3)

神代よりこのかづらき、吉野山などをすみかとして、とき／＼はかたちをかくしてみやこのありさまも、諸国にいたるまで、み

き、てすぎ侍き。

この部分から分かる翁の特徴は以下の通りである。

c. 神代から葛城・吉野山を住処にしている。

d. 時々姿を隠して旅に出かけ、都や諸国を見聞している。

一方、翁に関わる記述は序文だけではなく、本文にも見られる。

高橋・河北両氏の先行研究にはこの箇所への検討が見られない。翁

のイメージを再確認するために、この部分を検討する必要がある。

本文引用 (4)

十四年と申し、七月にみかど「わがまへにて勝鬘経かうじたまへ」と申たまひしかば、太子しゝのゆかにのぼりて三日かうじたまひき。そのありさま僧のごとくになんおはせし。めでたかりし事なり。おきなそのにはに「丁もんしてはべりき。(推古天皇

本文引用 (5)

さりながらも本所をわすれがたくして、三年に一度このかづらき山とふじのみねへとときたりたまふなり。とき／＼はあひ申はべり。唐にては第三の仙人にておはするよしぞかたり給。(文武天皇

本文引用 (4) (5) の記述から、翁の身分について以下のこと
が分かる。

e. 聖徳太子が勝鬘経を講ずる時に翁は聴聞した。その上、序文における翁の特徴 a によると、翁が修行者の法華経の読経

も聴聞している。故に、翁は仏教の信者であることが推測される。

f. 翁は時々役行者と会う。翁の話によると、役行者は唐国に渡った後、三年に一度日本に戻る、という。故に、翁は役行者との付き合いがあると推測できる。

しかし、これらの手がかりを通して、翁の身の上はまだ明らかではない。以前の鏡物と同様、翁は役行者と関わりがある虚構人物である可能性が極めて高い。次に、役行者に対する分析を手がかりに、翁のイメージについてさらに考察を進めていく。『水鏡』における翁の造形と『続日本紀』⁹⁾・『日本霊異記』¹⁰⁾・『三宝絵詞』¹¹⁾・『本朝神仙伝』¹²⁾・『扶桑略記』¹³⁾・『今昔物語集』¹⁴⁾・『水鏡』の役行者に関する記事を比較する。

『水鏡』の翁	a. 法華経を聴聞してから現れた。	『日本霊異記』の役行者	『本朝神仙伝』の役行者	『扶桑略記』の役行者	『今昔物語集』の役行者	『水鏡』の役行者
b. 瘦せ細っており、藤の皮で編んだ衣を着、杖を突いているが、妖怪変化などの姿ではなく、仙人のように見える。	被 _レ 葛 _レ 餌 _レ 松、沐 _二 清水之泉、濯 _二 欲界之垢、修 _一 習 _二 孔雀之咒法、	卅余年、窟中ニキテ、藤皮ヲキ給、松葉ヲクヒ物トシテ、	役優婆塞者。大和国野山。常遊葛木山。	卅餘箇年。被 _二 藤皮 _一 。餌 _二 松葉 _一 。以 _レ 之爲 _レ 業	年来葛木ノ山ニ住テ、藤ノ皮ヲ以テ衣トシ、松ノ葉ヲ食物トシテ、	卅余年のほどふぢのかはをきものとし、まつのはをくひものとして、
c. 神代から葛城・吉野山を往処にしている。	(役優婆塞) 大和国葛木上郡茅原村人也。	(役優婆塞) 大和国葛城ノ上郡千原村人也。	(役優婆塞) 大和国野山。常遊葛木山。	(役優婆塞) 大和国葛木上郡茅原村人也。	大和国、葛上ノ郡、茅原ノ村ノ人也。(中略) 年来葛木ノ山ニ住テ、	卅二といひしとしよを住処にしている。
d. 時々姿を隠して旅に出かけ、都や諸国を見聞している。	每 _二 庶 _二 挂 _二 五色之雲 _一 、飛 _二 仲虚之外 _一 、携 _二 仙宮之寶 _一 、遊 _二 億載之庭 _一 、	三寶ヲタノミアフグ事、常ノ心ザシトス。	修行仏法。神力無辺。	閑 _二 孔雀之神咒 _一 。窮 _二 奇異之験術 _一 。乘 _二 五色雲 _一 。通 _二 仙人 _一 都 _一 。	或 _二 時 _二 ニハ五色ノ雲ニ乗 _二 テ仙人ノ洞ニ通 _二 フ _一 。	五色の雲にのりて仙宮にいたり。
e. 聖徳太子が勝鬘経を講ずる時に翁は聴聞した。↓ 仏教の信者	仰 _二 信 _二 三寶 _一 、以 _レ 之爲 _レ 業。	今モ時 _レ ク、(日本国に)ハカヨヒユク。	難 _レ 忘 _二 本所 _一 。三年一度。詣 _レ 住 _二 於 _二 金峰葛山富慈峰 _一 。奇談奉 _二 代々天皇 _一 。	自性博學。仰 _二 信 _二 三寶 _一 。	清 _二 キ泉ヲ浴 _二 テ心ノ垢ヲ洗 _二 ヒ浄 _二 メテ、孔雀明王ノ呪ヲ誦 _二 ス _一 。	ひろくものをならひ、ふかく三寶をあふぎて
f. 翁は時々役行者と会う。翁の話によると、役行者は唐国に渡った後、三年に一度に日本に戻る、という。						三年に一度このかづらき山とふじのみねへとはきたりたまふなり。とき _レ はあひ申はべり。

現存資料における役行者の初出は『続日本紀』天武天皇の段である。

『文武三年（六九九）五月丁丑（廿四）』○丁丑、役君小角、伊豆嶋に流さる。初め小角、葛木山に住みて、呪術を以て称めらる。

外従五位下韓国連広足が師なりき。後にその能を害ひて、讒つるに妖惑を以てせり。故、遠き処に配さる。世相伝へて云はく、「小角能く鬼神を役使して、水を汲み薪を採らしむ。若し命を用ゐずは、即ち呪を以て縛る」といふ。

当段では、役小角が伊豆島に流された事情が記載されている。役小角の能力に嫉妬する韓国連広足の讒言によって、役小角が伊豆に流される。役小角の能力とは、それは鬼神を役使することである。命令に従わない鬼神は呪術で縛られると述べられている。この段落において、役行者の姿形への具体的な描写は見当たらない。

時代が下り、『日本霊異記』とそれ以降の書物では、役行者の姿形や彼を巡る話の描写がより詳細になされるようになった。これらの書物において、役行者は呪術者で修験道の開祖とされている。彼の呪術によって、鬼神を役使することができる。また、『日本霊異記』をはじめとする書物には、一言主神の讒言により、役行者が伊豆島に流された後、一言主神を呪術で山の下で縛る説話が見られる。

また、役行者の当時の仏教界における地位については、『今昔物語集』巻十一・本朝仏法部の配列を見れば分かるのである。¹⁵⁾

聖徳太子は初めて日本で仏教を広めた人で、『今昔物語集』などの書物に、観音菩薩の権化という説がある。行基は民衆に仏教を布教した人物である。その後、修験道の祖である役行者の説話が載せられていることから、役行者の日本仏教における地位が推測できる。即ち、役行者が始めた修験道は、日本仏教の発展にとって重要であり、聖徳太子の仏教布教の開始や、行基の民間での仏教の布教に次ぐ重要な行為であるとされているのである。以上のことから、役行者は日本仏教でも重要な位置に置かれているといえる。

『水鏡』は『今昔物語集』の後に成立した作品であり、作中には『今昔物語集』の役行者説話の類話が見られる。『水鏡』の役行者のイメージは『今昔物語集』から影響を受けた可能性もある。即ち、『水鏡』成立当時役行者は仏教界の重要な人物とされ、その事蹟が広く伝わっていたのである。

『水鏡』の翁の特徴 a は、法華経を聴聞してから現れたことである。『日本霊異記』・『三宝絵詞』・『本朝神仙伝』・『扶桑略記』・『今昔物語集』にも、道照禪師が新羅の山中で法華経を講じてから、役行者が現れて、道照禪師に話しかけたくだりがある。道照禪師―役行者と『水鏡』序文の修行者―翁とのイメージを重ね合わせると、『水鏡』序文の設定はこれらの書物に見られる役行者関係の説話から影響を受けた可能性がある。翁の造形には、一言主神よりも役行者から受けた影響の方が大きいのではなからうか。

翁の特徴bは、痩せ細っており、藤の皮で編んだ衣を着、杖を突いているが、妖怪変化などの姿ではなく、仙人のように見えたことである。『本朝神仙伝』を除く他のすべての書物に役行者は「葛、または、藤の皮を衣として着る」とある。これは翁と役行者にある共通点の一つである。

翁の特徴cは、神代から葛城・吉野山を住処にしていることである。すべての書物に、役行者の出身地は大和国、あるいは大和国の葛城であることが記載されている。その上、『三宝絵詞』・『今昔物語集』に、役行者は葛城で修験生活を送ったことも記載されている。葛城で生活した点についても、両者は共通しているといえるだろう。

しかし、役行者が神代から葛城・吉野山に住むという記述は見られない。高橋氏の指摘によると、翁が神代から葛城で生活するという特徴は、一言主神の特徴から造形されたと考えられる⁶⁾。それにもかかわらず、一言主神と『水鏡』の語りの起点である神武天皇との関連性は非常に薄い。一言主神に関わる説話は基本的に二つある。一つは『古事記』や『日本書紀』などに記載された、葛城山で雄略天皇と共に狩りをした話である。もう一つは、『日本霊異記』をはじめとする書物にある。一言主神は役行者の命令を受け、金峰山と吉野山に橋を架けていたが、一言主神の容貌が醜いため夜だけ作業することとなった。役行者はそれを許せなかった。そのため、一言主神は文武天皇に役行者の讒言をした。それを知った役行者は呪術

で一言主神を縛り、谷の底に置いたという話である。この二つの説話に、『水鏡』の語りの起点である神武天皇と一言主神との関連性があるいは、一言主神と『水鏡』に記載された日本の歴史の関連性は薄い。

そもそも、葛城の神が一言主神を指しているとは断言できない。むしろ、翁が神武天皇から歴史を語るという特徴は葛城に鎮座する事代主神から受けたと考えられる。

事代主神に関わる説話は記紀神話に多く見られる。彼に関わる重要な神話の一つは国譲りの箇所である。当箇所では、建御雷神が天照大御神の命令を受け、大国主神に国譲りを談判した。大国主神は直接決断を下さず、自分の子である事代主神と建御名方神に訊くようにと答えた。事代主神は国譲りのことを聞いて、すぐに服従したが、建御名方神は建御雷神と力比べをしてから服従したと述べられており、これによって、葦原中国の支配権は国津神系統の大国主神から天津神系統の邇邇芸命に譲渡されている。

事代主神は実際に『水鏡』の語りの起点である神武天皇との関わりがある。即ち、国譲りがなければ、邇邇芸命の曾孫に当たる神武天皇から始まった皇統が存在するはずがない。

また、国譲りの神話から見ると、事代主神は敗北者のイメージがあるが、『水鏡』の記述によると、神武天皇の皇后・綏靖天皇の母后である五十鈴姫は事代主神の娘であることがわかる。つまり、神

武天皇以後の代々の天皇は事代主神の血筋を継いだ。言い換えれば、事代主神は神武天皇との関係も深いし、歴代天皇の祖としての位置があると考えられる。

このような事代主神のイメージを持っている『水鏡』の語り手は、神武天皇から現代までの歴史を体験する上、その語りの重点とする皇統との近親関係をも持っていることから、語った歴史に信憑性を与えたのである。

翁の特徴dは、時々姿を隠して旅に出かけ、都や諸国を見聞していることである。姿を隠して旅をするという記述は明確には見られないが、『日本霊異記』・『扶桑略記』・『今昔物語集』・『水鏡』に、役行者は五色の雲に乗り、仙宮にかようという記述がある。この記述は翁の特徴dと完全に重ね合わせることはできないが、「旅に出かける」という点では類似している。

翁の特徴eは翁が仏教の信者だということである。すべての役行者に関する記事に、役行者は三宝に帰依する記述が見られる。仏教を信じることは翁と役行者の共通点である。

翁の特徴fは役行者と親しい関係を持つことである。『水鏡』以外に、役行者と親密な関係を持つ人についての記述はない。一方、『三宝絵詞』・『扶桑略記』・『今昔物語集』・『水鏡』に、役行者が中国に渡った後、三年に一度日本に戻る記述がある。特に、『扶桑略記』では役行者が日本に戻る時に、代々の天皇に奇談を奉ると記されて

いる。『水鏡』の場合、翁は時々役行者に会うことを述べた。翁も役行者から奇談を聴聞した可能性が十分考えられる。

以上、『水鏡』の語り手である翁を先行の書物及び『水鏡』の役行者と比較すると、翁の造形が先行研究に指摘された役行者・一言主神の他に、事代主神からの影響もあると考えられる。また、特徴c以外には、事代主神からの影響が見られないことによって、翁の造形に一番影響を与えたのは役行者だと考えられる。

このように、『水鏡』の真の語り手は、移動せず葛城の地域に住し、日本のことだけを知る日本の神より、「世界」を知り尽くした役行者から多大な影響を受けていると考えた方が合理的だと言える。役行者が語り手の場合、彼は日本や中国で生活したことがある。また、道照禪師の説話に、役行者は新羅にも行ったとある。さらに、彼は優婆塞、つまり在家の男の仏教信者であるため、仏典などの仏教関係の書籍を通じて、インドの情報を得た可能性もある。要するに、役行者は当時の「全世界」のことを知っている存在になるわけである。

また、役行者と親しい関係を持つ翁が語り手である場合、翁は役行者を通じて、日本・中国・新羅の三箇国の事情を知ることになる。インドのことは役行者を通じて知るようになる可能性もあり、翁自身も仏教の信者であるゆえ、仏典などの仏教関係の書籍から直接情報を得た可能性もある。要するに、翁も当時の「全世界」のことを

知る存在となるわけである。

ともあれ、『水鏡』は、語り手が当時の全世界を知っているということを前提に、日本の歴史を語ったものと考えられる。ここで、『水鏡』の語り手が語った日本の歴史を振り返ると、日本は孤立しておらず、当時における全世界の歴史の一部となると言えるのである。

四、『水鏡』本文に見る著者の歴史叙述の意図

『水鏡』本文において、原典とされる『扶桑略記』に見られない著者の意図が現れる部分がある。これらの部分を分析することによって、著者の歴史叙述の意図が一層明らかになるとと思われる。

本文引用（6）

位につかせおはしまし、としぞ、釈迦仏涅槃にいり給てのち、二百九十年にあたり侍し。されば世あがりたりとおもへども、ほとけの在世にだにもあたらざりければ、やう／＼よのすゑに
てこそは侍けれ。(神武天皇)

神武天皇の段の最後では、神武天皇の即位の時期を仏教紀年で換算している。『扶桑略記』現存の部分を見ると、各天皇の没年を仏教紀年で換算する記述がある。『水鏡』の場合、仏教紀年で換算したのは神武天皇の即位年次だけである。神武天皇を語りの原点とした『水鏡』全体の基調は仏滅後の世界である。言い換えれば、日本歴史の始まりの時代からすでに仏が存在しないということである。

仏が天竺で説法をした。中国においても、日本より先に仏の教えが広まった。『水鏡』の著者は天竺・中国と対照される日本はただ仏滅後にできた小国だと認識し、日本の歴史を叙述したのだと考えられる。『水鏡』の日本の歴史語りは単一な日本を視野に入れたのではなく、日本が置かれる世界的環境を意識し、他国の状況と比較したからこそ得られた、日本を国際的・多面的に見つめる歴史観に基づくものであるといえる。

また、開化天皇の段に、次のような記述がある。

本文引用（7）

この御よのほど、ぞおぼえ侍。南天竺に龍猛菩薩と申僧いますなりとうけ給しに、真言をはじめてひろめ給しことはこの菩薩たまへりけるを、百年と申しにぬす人やき侍にけり。いづこも／＼心うきは人の心なり。その、ち十三年ありて、六師迦王やつくりたまへるとうけ給しは、この御時くらむにつかせ給て十年など申しほど、ぞおぼえ侍。(開化天皇)

これは祇園精舎の建立と焼失の話である。インドのことを通じて、著者は「どこでも人の心は情けないものだ」という慨嘆を漏らした。インドで発生したことを記述していても、著者の関心はインドのみにとどまらず、日本・中国・新羅にも及んでいるのではないだろうか。

さらに、天武天皇の段で、壬申の乱の経緯と結果を記述した後、

次のような一文がある。

本文引用（8）

みかどは皇子の御をぢにておはせしうへに、御しうとにてもおはしまし、ぞかし。かた／＼したがひたてまつり給へかりしを、あながちにかつにのりたまへりしことのほとけかみもうけ給はずなりにしにこそはべめれ。（天武天皇）

この部分において、『水鏡』の著者は壬申の乱への考えを述べている。著者は、天武天皇が大友皇子の叔父であると同時に大友皇子の舅でもあることから、大友皇子は天武天皇に逆らうべきではないとし、このようなことが起こっては、神仏がゆるさないと評した。『水鏡』の原典とされる『扶桑略記』は、壬申の乱を記述し、大友皇子の敗北・天武天皇の勝利へと集約したのであるが、『水鏡』はそれとは違い、大友皇子と天武天皇との近親関係から、大友皇子が天武天皇に従うべきであることを説明し、大友皇子が戦争を起こす行為を批判した。

『水鏡全注釈』ではこの部分について、「以下「ほとけかみもうけ給はずなりにしにこそはべめれ」までは作者自身の感想。あるいは保元の乱を念頭においてのものか」という解釈を行っている。

『水鏡全注釈』の解釈を踏まえると、著者は『水鏡』を編成する時に、昔の事に関心を示すと同時に、現代の出来事との結びつきも忘れていないと考えられる。恐らく、保元の乱を起こした崇徳院への評論

を回避するため、類似する過去の事件、権力者と親しい関係を持つ人間が起こした戦乱である壬申の乱に自分の考えを書き残したのであろうと推測できる。

ここで注意すべきことは、前述した『水鏡』序文の「おほかたはいまのよをはかなくみうとみ給て、いにしへはかくしもあらざりけんとあさくおぼすまじ。すべて三界はいとふべき事也とぞおぼすべき。この目のまへのよのありさまは、おりにしたがひて、ともかくもなりまかるなり。いにしへをほめいまをそしるべきにあらず」という趣向である。

壬申の乱に見られるような評論は他にも数箇所見られるが、これは著者の「今は昔と同じ」の論点と大きく関わっているのであろう。そして、このような評論はまさに前述した「長い歴史を総括的に把握する」歴史観を表しているのである。

以上の（6）～（8）の三つの話を総合的にみると、『水鏡』の著者には、日本の歴史を語る時に、「世界」という立場に立ち、長い日本の歴史を見渡して、日本の歴史事件を捉えなおそうとする歴史叙述の意図が見られる。

五、おわりに

『水鏡』は『大鏡』・『今鏡』と違い、日本の歴史を語る時に、日本だけではなく、当時における「全世界」を視野に入れて、日本の

歴史の再検討を行ったのである。また、タイムスパンからいうと、『水鏡』は長い時間帯における日本の今と昔を連想しながら歴史を語っている。要するに、「日本の昔と今」、「日本と全世界」、これが『水鏡』の語ったコスモロジーである。そこに著者の歴史叙述の意図が窺える。いわば、世界の中の日本、長い歴史を渡ってからの今を強調したいということである。このことは、本稿で論じた『水鏡』の語り手の設定及び、神武天皇・開化天皇・天武天皇の関連記事を考察することによって明らかになった。

総じて言えば、『水鏡』の時代になると、鏡物は一国の歴史に限定されておらず、当時においての全世界を視野に入れ、一国の長い歴史を全面的に語っている。この「今と昔」、「世界に向ける視野」こそが『水鏡』の特徴であると結論付けられる。

【注】

- (1) 『史学雑誌』(一九〇三年二月)
- (2) 『日本古典の成立の研究』(日本書院、一九五九年)
- (3) 『女子大国文』一〇九、一九九一年六月
- (4) 西脇常記訳注『史通内篇』(東海大学出版会、一九八九年)
- (5) 本稿での『水鏡』本文引用は金子大麓等注釈『水鏡全注釈』(新典社、一九九八年)によるものである。
- (6) 『歴史物語講座』巻五(風間書房、一九九七年)
- (7) 高橋氏の論文は「葛城の仙人」という標記を使っているが、本論文の「翁」と同じ人物である。

- (8) 『マテシス・ウニヴェルサリス』三巻一号、二〇〇一年二月
- (9) 『続日本紀1』新編日本古典文学大系12(岩波書店、一九八九年)
- (10) 『日本霊異記』新編日本古典文学全集10(小学館、一九九五年)
- (11) 『三宝絵 注好選』新編日本古典文学大系31(岩波書店、一九九七年)
- (12) 『往生伝 法華験記』日本思想大系(岩波書店、一九七四年)
- (13) 新訂増補『國史大系』第12巻(吉川弘文館、一九六五年)
- (14) 『今昔物語集①』新編日本古典文学全集35(小学館、一九九九年)
- (15) 新編日本古典文学全集35『今昔物語集①』巻十一の前三話の題目は「聖徳太子於此朝始弘佛法語第一」、「行基菩薩学仏法導人語第二」、「役優婆塞誦持呪驅鬼神語第三」である。
- (16) 前掲論文。

—り・しんし、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—